

26年3月上旬に岩手県沿岸を巡りました。盛岡のUR都市機構・岩手震災復興支援局にお邪魔して挨拶をしてから、現地事務所のUR時代の知人、友人たちを訪ねて回りました。宮古市⇒山田町⇒大槌町⇒野田村⇒釜石市⇒大船渡市⇒陸前高田市と行く先々で感じたことは、ただ住民の方のご苦勞と無念さと、現地事務所のUR職員が疲れているなあ・・・ということでした。

3月初めの三陸海岸は寒く、福島県の阿武隈山系に比べて北上山系は深く険しいということが記憶に残っています。山越えの道、吹雪を衝いて進む車の中でURのOB職員Mさん（実に30年来のお付き合いですが）の話を聞きながら、2011年の冬を現地で過ごした元同僚たちのご苦勞に頭が下がるだけでした。現在、働いている方々もUR時代の私と同じだけの歳月が過ぎている訳ですから、久しぶりに会ってお互い「歳を取ったなあ・・・」という感慨も深かったことも感想の背景にはありました。



「復興の槌音が・・・」的なことはとても言えません。ただ、山田湾を始めとして三陸海岸の海は美しく、津波に遭遇していない者が軽々しくいう訳にはいきませんが、景観と生命のどちらも失いたくないという思いが残りました。



釜石市の蓬莱館に一泊し、女将さんの話に胸を打たれ、今年の家族旅行はここにしようと考えました（8月に実行）。



大船渡の仮設店舗のイワシチャーシューラーメンは絶品でした。最後は、陸前高田市の「奇跡の一本松」・・・駆け足の3日間でした。お付き合いいただいたMさんとURの方々に深くお礼申し上げます。

できることはまず現地を見ることとお土産をたくさん買い込むことが直接的な貢献だと思い、まずは実行しました。

CM（コンストラクションマネジメント）契約に基づくUR受託の土地区画整理事業は、「起工承諾方式」で工事が進められていました。その内容は、25年6月の土木史研究会発表の論文でも触れていますが、ニュータウン事業の知恵と経験が役立っています。

24年度の6月の土木史研究会発表論文と併せて26年10月に土木学会研究論文集D2（土木史）に「土地区画整理の制度形成に関する史的考察」としてまとめました。

なかなか震災復興の直接的なお手伝いはできませんが、きちんと記録に残して研究論文としてまとめること、編集長を務めている「区画整理士会報」で編集委員のみなさんや事務局の方々と知恵を絞って、震災復興事業の特集記事を組むことを続けていきたいと考えています。

